
送り桜

曇坂陽向

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

送り桜

【Nコード】

N4208H

【作者名】

曇坂陽向

【あらすじ】

桜の名所に花見をしに来た万事屋の3人と桂。しかしその桜の名所は、銀時と桂にとってどうしても忘れない場所だった。

（前書き）

私のサイトでアップした小説を修正したものです。
短いですが、最後までお付き合いしていただけたら幸いです。

あの日も桜が咲いていた

しかし、桜がどれほどに美しかったのか

あの時の俺には分からなくて

そしてそれは、ただただ散っていったのだ

「銀ちゃん！新八、ツラ！早く行くネ！歩くの遅いアル！」

「ツラじゃない桂だ。」

「いいじゃねえか…減るもんじゃねえし。」

「早く見たいのは分かるけどゆっくり行こうよ、神楽ちゃん。」

銀時と桂、新八、神楽は歌舞伎町の隣町にある賑やかな大通りを歩いていた。

神楽が一番前を歩き、みんなを急かしている。

「つーか何でこいつがいる訳？」

銀時は桂を指で差した。

「それはこちらの台詞だ。」

桂は腕を組み、横目で銀時を見る。

「まあまあ、いいじゃないですか。人数多い方が花見も楽しいですつて。」

「偶然バツタリ会っちゃったら仕方ないアル。」

一行は今、桜の名所と呼ばれる大きな公園へ向かっていた。

神楽が朝のニュースを見ていたところ、偶々桜の名所特集をやっており、その名所が家から近かったらしい。

そこで神楽がみんなをその公園に案内している所だった。

「もうすぐ着くネ！」

神樂が元気よく振り向く。

一行は神樂に案内され、のんびり歩いていた。
進めば進むほど人混みは多くなっていく。

「あ！見つけたアル！」

「…わぁ！すごいですよ、銀さん！桂さん！」
神樂も新八も年相応にはしゃいでいる。

「…おい銀時…」

「……ああ……」

「もう！銀ちゃんもヅラも遅すぎネ！」

「早く行きましようよ！」

神樂と新八が後ろでのろのろ歩いている2人を手招きする。

「そんなせかせかすんじゃねえ！長生きできねえぞおー」

「大丈夫アル！少なくとも銀ちゃんとヅラと新八よりは長生きする
ネ！」

「ヅラじゃない！桂だああ！！」

「何で僕も入ってるんだよ！！」

ワイワイやっている内に、公園に入った。

「わぁ…こんなキレイなの初めてみたネ…」

「どこを見渡しても薄桃色だ…」

神楽と新八はずっと上を向いたまま歩いている。

「てめえら前見ねえと転ぶぞ。」

しかし2人は銀時の注意など聞かず、ずっと上を見渡している。

「…まあここまで見事だと無理もない。」

桂は小さく笑った。

「……。」

「おーあそこのベンチ空いてるヨー！」

「ホントだ。座ろうか。」

神楽は銀時を、新八は桂を引っ張ってベンチに座らせた。

「…で、これからどうすんの？」

「…のど渴いたアル。コロナミンC飲みたいネ。」

「買いに行けよ。」

「金ないアル」

「新八！神楽に買ってやれえ！ついでに俺のいちごミルクも買って来い！」

「新八くん、緑茶を頼む。」

「いや、意味分かりませんから！なんで僕ですか！？とりあえずここは大人が払うとこですよね！？」

「えゝ！」

「何いつちよ前に駄々こねてんですか！」

ガヤガヤ言い争っていたが、最終的に銀時と新八が買いに行く事になった。

「見事2人をパシらせたネ！」

「やるなリーダー」

「私にかかればチョロいもんアル。」

残された神楽と桂は満開の桜を楽しみながら喋っていた。

「……なあ、ツラ。銀ちゃんとツラって一回ここに来たことあるネ？」

「……？……何故そんな事を聞く。」

「なんか銀ちゃんとツラ見てたらそんな感じがしただけヨ。」

「……リーダーは勘が良いのだな。」

桂は静かに笑った。

「やつぱりか！……なんで黙ってたアルか？」

「……いや、黙っていたという訳ではないのだが……。……昔、銀時や他の友と共にここに来た事があってな。」

（正しくは『来た』ではなく『来てしまった』……だが……）

「？……ふーん」

神楽は不思議そうに相槌を打った。

「神楽ちゃん！桂さん！」

すると向こうから、大きなビニール袋を両手に持った新八が歩いてきた。

「新ハイ！」

「……………」

（銀時が…いない…）

「あれ…銀ちゃんはどうしたアルか？」

「…そ、それがさ…」

新八は重そうにビニール袋をベンチに置いた。

「銀さん、途中まではビニール袋持ってきてくれたんだけど、何を思い立ったのかいきなり『ちょっと用事思い出した』とか言っていてどっか行っちゃったんだ。」

新八はため息をつく。

「意味分かんないネ」

「だよね。」

「……………」

「んー…………とにかく食べようか。」

「うん！銀ちゃんなんかほっとくアル。」

「桂さんも食べましょうよ。」

「……いや…俺は銀時を探してくる。」
そう言つと桂は立ち上がった。

「え…」

「ほつときゃいいヨ!どうせまたすぐ戻つて来るネ。」

「…いや…銀時の行つた場所に心当たりがあつてな。」
桂はゆっくり歩き出す。

「…?…」

神楽と新八はポカンとしながら桂を見送つた。

「……………」

《金時！木を切ってはいかんぜよ！》

（あれは…）

高杉も、切らなかった。

「……………」

銀時は一本の桜の木の下にいた。

その木だけ他の桜と少し離れた所に立っており、人通りはなかった。木には鋭い切り傷がついている。

「銀時」

「！」

呼ばれた瞬間、分かった。

「ツラかよ」

「ツラじゃない桂だ。」

「何しに来た」

「…それは…愚問というものだろう？」

「……………そうだな。」

桂もその桜の木を眺めている。

「あの時は…全く気付かなかったな」
「……。」

「この桜がこれほどまでに美しかったなど、誰も気づいてはいなかった。」

桂は少し目を細めた。

「…俺はこの桜の木があ那时的戦いに邪魔だった。…だから切ろうとしたんだが……辰馬が…木を切るなつつた。」

「…辰馬がそんな事を言ったか」

「…高杉も切らなかつたな。」

「…………。」

少しの沈黙。

「…辰馬と高杉は…」

「…知っていた…？」

「桜が…美しいって事を…」

「知っていた…」

「…へっ……あいつらがそんなタマかよ」

「…確かにそうだな。」

2人は笑った。

「今思えば…ここが一番の激戦区だったかねえ…。」

「ああ。…あの日も…桜は舞っていたのだろうか…」

「…一応咲いてたみてえだし…舞ってたんじゃないの」

「…みんな…これを見て逝ったのか…」

「…だから…」

（切るなっと言ったんだな）

「俺達はずくづく幸せだ。…生きながらにしてこの桜を見ていられる」

「…。」

この公園は昔、攘夷戦争の激戦区となった場所であった。

追い詰められた銀時達が死力を尽くして戦った場所。

…しかしそこは同時に、多くの仲間をいっぺんに失った場所でもあった。

この地でどれほど大切なものを失ったのだろうか。

「…しかし生き残りの中でも、こんなに暢気に桜見てんのは俺達だけだろうぜ。」

「生き残りといったって…ほんの数人だが…奴らは今何をしているのだろうな。…知っていても…変わってしまった奴もいるが。」
「……………」

《国どころか 友一人変えることもままならんわ！》

「…俺達はあれから…みんな一人になった。…要するに行く道もバラバラになっちまったのさ。」

「…まあ…よく考えてみればそれが当たり前だな。」

「でも今は1人じゃないアル!!」

「!?!」

突然聞こえた高い声。

「か、神楽ちゃん!」

近くの桜の木の影から神楽と新八が飛び出して来た。

「神楽…新八…」

「銀ちゃんには私達がいるネ!!」

「そ、そうです!」

「昔の事なんて知らないアル! 銀ちゃんは私の知ってる銀ちゃんだよ!…だから1人だなんて言うなヨ!」

神楽は人目もはばからずに叫んだ。

「……………」

銀時はあまりに突然の事でポカンとしている。

「…俺をつけてきたのか。」

桂は優しく笑った。

「…よかったじゃないか、銀時。」

「ツラも1人じゃないネ!! 私達も銀ちゃんもいるし、エリーもいるアル!」

「!」

桂はまさか自分にも言ってくれるとは思っていなかったらしく、返答に困っている。

「だってよ。よかったな、ツラ。」

銀時はニイつと笑った。

「ツラじゃない桂だ!」

嬉しかったのか恥ずかしかったのかは分からないが、桂の顔が火照っているように見えた。

「…さあ、お腹も減りましたし、もどりましょうか!」

新八が元氣よく笑う。

「私お腹減り過ぎて死にそうアル。銀ちゃん、ツラ、早く来るネ!」
神楽と新八はまた人混みの多い方へ歩いていく。

「……。」

銀時と桂はお互い顔を見合わせて、少し笑った。
そしてゆっくり神楽と新八について行く。

「なあ銀時」

「ん？」

「俺は、これほどまでに美しいものを初めて見た気がする」

「…気がするんじゃないよ。…そうなんだよ。」

「またみんなで来るネ！」

「次は来年ですね！」

今日も桜が咲いていた。

あの日と同じ、儚い桜。

みんなを見送ったこの桜は、この世のものとは思えぬ程に美しく
これからも咲き続けるのだ。

e n d .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4208h/>

送り桜

2010年10月11日00時30分発行